

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	ケースメソッドの学習評価法としてのコンジョイント分析の適用に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	内田瑛
Author(English)	Hikaru Uchida
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10868号, 授与年月日:2018年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:寺野 隆雄,山村 雅幸,三宅 美博,出口 弘,小野 功,吉川 厚
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10868号, Conferred date:2018/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	論文要旨
Type(English)	Summary

(論文博士)

論文要旨 (和文2000字程度)

報告番号	乙 第 号	氏 名	内 田 瑛
<p>本論文は、ケースメソッドにおける学習者の気づきを評価する手法としてコンジョイント分析を適用することを提案し、以下の6つの章で構成されている。ケースメソッドは、学習者が自らの知識を活用して思考を深める教育手法である。教師は学習者の気づきに合わせて徐々に問いを深めていく。しかしながら、学習者の気づきを客観的に評価する手法は確立されておらず、そのためにファシリテーションやデブリーフィング技術は、教師の熟達に依存するところが大きい。本論文ではその評価手法としてコンジョイント分析の適用可能性を示す。本研究の最終的な目的は、学習者の気づきを捉える評価手法の確立と、それを教師にフィードバックすることでケースメソッドを学習システムとして体系化することである。</p> <p>第1章「序章」では、本研究の背景と目的、論文構成について述べる。ケースメソッドでは教師は学習者の主体性を重視しつつ、学習目標に合った気づきを促すように議論をリードする。このとき教師は学習活動として何が起きており、学習目標が達成されたかを観察するが、それを評価する手法は確立されていない。従来は、学習者の主観による報告や教師の観察などの方法が採られているが、いずれも学習目標に合った気づきであったかを客観的に評価するのは困難である。本論文では、学習目標に合った評価項目をあらかじめ定め、統計手法を取り入れて評価する方法を提案する。</p> <p>第2章「関連研究」では、ケースメソッドにおける従来の学習評価方法を取り上げ、その問題点を述べている。本研究で対象とする、学習者の知識活用力は、学習者によるレポートなどの成果物評価、授業内での発言、行動の観察などから評価されている。しかしながら、同じ成果物であっても評価者によって評価がばらつく、発言していない・行動していない事柄からは評価できない、学習者がどんな気づきを得たのかを誘導的にならない設問で尋ねることは難しい、などの課題がある。また従来の手法の多くは、学習目標の達成の観点で評価手法が事前に設計されていない。</p> <p>第3章「学習評価手法としてのコンジョイント分析」では、2章で述べた課題を解決する手法としてコンジョイント分析の適用を提案している。心理測定手法としてのコンジョイント分析の手順と特徴、広く応用されているマーケティング調査での分析の流れを取り上げ、本論文で提案する学習評価手法としてのコンジョイント分析の方法について述べている。マーケティング調査の分野では調査結果に基づいて購買可能性の高い新製品を予測シミュレーションするため、調査者は製品開発者とともに調査項目定めることが推奨されている。</p> <p>本論文ではこれに則して、評価者は学習目標を定める教材開発者や教師とともに要因を定めることをポイントとしている。気づきに関わると思われる要因を定め、その組合せで作られる状態に対する学習者の全体的な反応から、気づきの特徴を分析的に評価する。教師が問いを深めていく前後で、同一のコンジョイント分析による評価をすることで、その差分から学習者の気づきの変化を捉えることを提案している。</p> <p>第4章「ビジネスゲームを用いた学習評価手法としての評価実験」では、ケースメソッドとビジネスゲームを融合したゲーム教材を用いている。学習者の気づきを、ゲーム中の意思決定行動、チーム内で作戦会議をしている会話内容、コンジョイント分析による「望ましい経営状態」に対する反応の3つを比較し、コンジョイント分析の学習評価手法としての適用可能性について議論している。各評価手法はその特徴の違いにより部分的な一致が限界ではあるが、学習者の気づきの評価手法として、ある程度の適用可能性を示している。</p> <p>第5章「マンガケースメソッドへの適用」では、3章を踏まえ、実際のケースメソッドにコンジョイント分析を適用しており、コンジョイント分析の手順や設計について述べている。コンジョイント分析の設計は教材の開発者とともにあらかじめ行った。教師が学習者に与えた問いは、様々な登場人物の観点に立たせて多角的に議論させるものであり、問いが深まっていく前後でコンジョイント分析による評価を行った。学習者の気づきの変化を捉え、学習目標の達成という観点で気づきの変化を分類している。</p> <p>第6章「結論と課題」では、ケースメソッドにおける学習者の気づきを捉える手法としてコンジョイント分析の適用可能性が示され、またコンジョイント分析が学習評価手法として適用される点についての新しさについて言及している。また、学習評価手法としてコンジョイント分析を適用するにあたっての課題についても述べている。</p> <p>本研究の貢献は、ケースメソッドにおいて学習者の気づきを学習目標と照らし合わせたときに、どのような気づきを得て、また学習によってどのように変化したのかを評価することが可能になった点である。ファシリテーションやデブリーフィング技術の発展に貢献することが期待される。</p>			

備考：論文要旨は、和文2000字と英文300語を1部ずつ提出するか、もしくは英文800語を1部提出してください。

Note：Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1copy of 800 Words (English).

注意：論文要旨は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。

Attention: Thesis Summary will be published on Tokyo Tech Research Repository Website (T2R2).

(論文博士)

論 文 要 旨 (英 文)

(300語程度)

(Summary)

報告番号	乙 第	号	氏 名	内田 瑛 Hikaru Uchida
<p>This paper proposes applying conjoint analysis as a method to assess learners' awareness in case method and consists of the following six chapters. Case method is an educational method that learners use their own knowledge to deepen their thinking. The teacher gradually deepens the question according to the awareness of the learner. However, no method for objectively assess learners' awareness has been established, so facilitation and debriefing techniques are largely dependent on teacher proficiency. In this paper, we show applicability of conjoint analysis as its evaluation method. The ultimate goal of this research is to establish an evaluation method to capture learners' awareness and systematize the case method as a learning system by feeding it back to the teacher.</p> <p>The structure of this paper is as follows.</p> <p>Chapter 1 explains the background and propose of this research.</p> <p>Chapter 2 discusses the trends of research on case methods, and some problems on learning evaluation field.</p> <p>Chapter 3 describes the procedure and some precautions for applying Conjoint Analysis as a learning measurement method.</p> <p>Chapters 4 is evaluated as a learning evaluation method by applying Conjoint Analysis to a business gaming with case method.</p> <p>Chapter 5 is applied Conjoint Analysis to the actual case method, and detected three patterns based on learning goals.</p> <p>Chapter 6 describes the contribution and issues of this research and conclusion.</p> <p>The contribution of this research is to assess what kind of awareness and how it changed by learning when comparing the awareness of the learner with the learning goals in the case method by means of conjoint analysis. It is a point that became possible. Compared with other methods, usefulness of conjoint analysis was evaluated. In future, it is a challenge to develop case method more effectively as an educational method by incorporating learning evaluation.</p>				

備考：論文要旨は、和文2000字と英文300語を1部ずつ提出するか、もしくは英文800語を1部提出してください。

Note : Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1copy of 800 Words (English).

注意：論文要旨は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。

Attention: Thesis Summary will be published on Tokyo Tech Research Repository Website (T2R2).